

令和2年(2020年)7月12日(日曜日)

## 社説

&lt;2020.7.12&gt;

## 伊豆東部の観光

## コロナ共存のモデルに

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐための都道府県境をまたぐ移動の自粛が全面解除され、静岡県の伊豆・東部地域にも観光客が戻りつつある。ただ、国内の感染収束は見通せず、東京都を中心に感

染者が再び増加傾向にある中、回復への道筋は困難が予想される。新型コロナウイルスとの共存モデルになる新たな観光戦略が求められる。

首都圏から伊豆などを訪れ、日帰りなどで楽しむレジャーは、安く、近く、短くの「安・近・短」と呼ばれてきた。新型コロナウイルス以降の発想として、企業経営研究所(三島市)は新たな「安・近・単」をキーワードに挙げる。

第一に感染防止対策を徹底した「安全安心」の提供が重視される。「近距離」移動の場所以、団体ではなく家族

や友人らと「小さい単位」の旅行を楽しむ形態が増えてくると説明する。

もともと伊豆・東部は首都圏の「近場」としての強みがある。コロナ禍前に増加していた訪日外国人客の来訪はしばらく期待できず、国内をターゲットにした誘客に力を注ぐしかない。

現状の観光資産を磨き上げること、コロナ後の地域経済の発展につながる。感染症対策として接触を減らすためのキャッシュレス推進は、将来的な訪日外国人対策になる。

テレワークが広がり「ワーク(仕事)」と「バケーション(休暇)」を組み合わせた「ワーケーション」の普及も戦略に取り入れたい。都市部と比べて「密」を避けられるのが地方の武器となる。官民挙げて通信環境の整備など利点を生かせる施策を進めてほしい。首都圏からの観光客が7割超を占め

る熱海市でも、地域経済回復に向けた慎重な協議を進める。その中で地元市民の誘客に着目した取り組みは「安・近・単」の試金石になろう。

ホテルや旅館が設定した市民向け宿泊プランで使用できるクーポン券を発行したところ、予定の4倍近い申し込みがあった。市内の宿泊施設を利用した市民が、その魅力を会員制交流サイト(SNS)や口コミで発信することも期待したい。市民が地元の主産業を理解し、協力することは、観光再興の大きな力になる。

宿泊施設が利用客を「囲い込む」という従来の考えからの脱却も進むことになるだろう。街全体が潤うよう、施設内の宴会場やビュッフェスタイルでの食事提供にこだわらず、市内の飲食店に誘導して楽しんでもらう「泊食分離」の加速につなげたい。

選ばれる観光地となるためには、受け入れ側が意識を変え、柔軟に対応していくことが必要だろう。